



高崎市

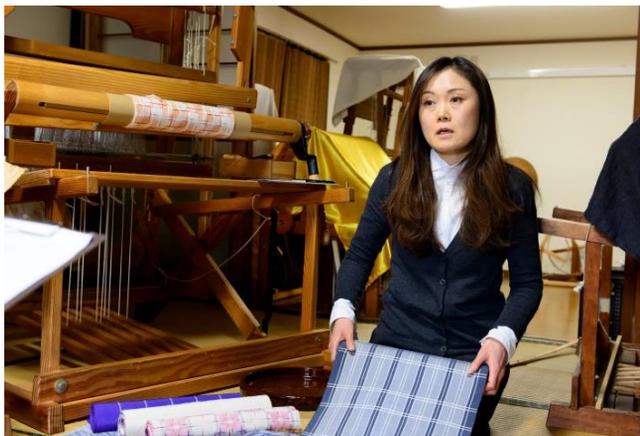
おか だ のり こ
岡田 教子さん

岡田教子機織り教室主宰 / 染織作家

伝統と革新の織物。
絣の道を究める染織作家

群馬県高崎市生まれ。女子美術大学芸術学部工芸科に進学し、染め、織り、陶芸を学ぶ。絣（かすり）と出会い、「これなら思い描いていた作品が作れるのではないか」と思い、3年時に織りコースを専攻し、卒業。さらにその技術を学びたいと同大学大学院美術研究科染織を専攻し、大学院では主に「ずらし絣」の技法を研究した。2002年から地元の高崎で岡田教子機織り教室を主宰。教室では、デザイン・糸染め・織りの工程を学べ、絹や木綿、ウールなどを素材に、帯やタペストリーなどを自由に制作することができる。絣の技術を用いたタペストリーといったアート作品に加え、伝統的な帯の製作も手がけている。また母校で教鞭をとり、染めと織りの技術を次世代に伝えている。

群馬県展入賞、ぐんま女流美術協会会員。



作品を手にインタビューに答える岡田さん。

Q 織物との出会いを教えてください。

子どもの頃から、紙や木など周りのものを使って、何かを作るのが好きでした。自分の表現する手段としてどんな技法がいいかなと思っ、大学は工芸科に進みました。



身につけるものには全て天然染料を使っている。

1年生で染め、織り、陶芸を体験して、3年生の時に織りコースに進みました。さらに大学院では「ずらし絣」という技法について研究しました。絣の技法を学んだ時に、自分が思い描いているような作品がこれなら作れるのではないかと思いました。

また、織りは手間や労力もかかる仕事なので、長い期間をかけて学ぶことのできる仕事だとも思いました。

Q 現在の仕事内容を教えてください。

織物教室は、大学院卒業後に始め、母校で講師を務めています。高崎市染料植物園では講習会も開催しています。そして、自分の作品も作っています。

Q やりがいを感じる時は？

生徒さんが自分の思うような作品が作れた時に、喜んでいる姿や笑顔を見たときです。織りの道は長くて険しくて、本当に奥が深く、大変な仕事だけでもやめられない。楽しいから続けられます。



実家の母屋を教室とアトリエとして使用している。



絣の技術を用いた模様、吉野格子。



デザイン、糸の染め分け、機織りと気の遠くなるような作業を経て作品が完成する。

Q これまでに印象に残っていることはありますか？

先日、81歳の生徒さんが教室を卒業しました。60代から教室に通い始め、70歳の頃に大きな作品を制作した方です。意欲的な方で、織りに対する情熱をここまで持っているってうらやましい、すごいなど、刺激を受けましたね。

Q 印象に残っている作品、転機になった作品はありますか？

2009年の個展で発表した、大きな鳥があしらわれた3mのタペストリーです。鳥の部分は白く織りこして、筆で描いてミックスさせました。織ったものに絵を描くのは邪道だと思っていたけれど、少しアートの的な要素も取り入れたいとも思っていたので、思い切ったチャレンジした作品です。ここから少し絵画的な要素を取り入れて、模様と組み合わせる発想が生まれました。しかし、伝統的な作品を作ることでも大事なので、



一本一本、心を込めて織り上げている。

どちらかに偏らないよう、両方平行しながらやっています。

Q 織りの仕事をしていて、群馬という場所はどのように感じますか？

活動はしやすいですね。絹を主に使っているので、碓氷製糸さんに糸の注文もできますし、農家さんから繭を譲ってもらって座繰りをしたり。染色では、染料となるものが入手しやすいです。作家という立場で言うと、自然が近くにあって四季の移ろいがあるのもいいですね。

Q 今後、取り組みたいことはありますか？

このまま緋の技法で続けていきたいです。糸の太さひとつ違っても、また家蚕と野蚕の絹糸でも全然違ってきますので、極めるには時間が足りない。ひたすら頑張っ

INFORMATION

岡田教子機織教室

(おかだのりこはたおりきょうしつ)